

時代を読む

渡辺 利夫



東アジア共同体が今年のジャーナリズムの重要なテーマの一つであった。日本国内での議論はまだ収束していない一方、中国主導の東アジア秩序形成は着々と実を結びつつあるかにみえる。

「曖昧戦略」で中国外交に対応して勝ち目はない。日本は戦略思想においてなお薄い。東アジア共同体は、日本が海洋国家として生きていくのが、あるいは大陸国家との連携の下で生きるのかについての鋭い選択を迫るテーマにほかならない。外交の要諦は、過去の歴史的事実の中にその先例を見いだ

「東の日本」「西の中国」

「陸のアジア」「海のアジア」

ますますの興隆期を迎えたのが

アメリカである。極東における

日本の勢力を削ぐには日英同盟

の発展を

日本は

日本は

日本は

日本は

日本は

日本は

第一次大戦の勃発により、ヨーロッパ勢力が手薄となった中國大陸において主役を演じるようになつたのが日本であった。

敗戦後の日本は新たに日米同盟を結び、穏やかな「戦後六年」を打ち過ごすことができた。

アメリカとは大西洋と太平

洋に挟まれた巨大な「島」であ

る。

この日のポイントは日米同盟

といふ、日英同盟に代わる「海

洋国家同盟」の成立である。

近現代史における日本の幸福

を廢棄に追いやる以外になしとロシアの南下政策に強い危機

アメリカは冷然にも判断し、そ

は海洋国家同盟によって得ら

れ、その不幸は大陸への積極的

な関与によってやってきた。

この同盟により露仏同盟を

にイギリスが同意し、日本も同

に追随して日英同盟廢棄に肯

（拓殖大学学長）

の日本であった。日清戦争の勝利によって日本が手にした遼東半島は、強圧的な三国干渉によって中国に返還を余儀なくされ、以降、ロシアの意のままとなつた。清国に代わって、世界最大の陸軍大国ロシアが南下政

の躍動を押しつぶめて、日本は三年のことであった。その後の日本は欧米列強から猜疑の眼を向けられながら独力で懸の深い同盟」にあつたといつておられる。

日露戦争勝利の外交的根柢

は、日英同盟といつ「海洋国家同盟」にあつたといつのがこ

の國力のすべてを日露戦争に注ぎ込んで、これに勝利する」とがで

きかけってきたのであり、この風

利によって強い風压を日本に吹きかけてきたのであり、この風

利によって強い風压を日本に吹きかけてきたのであり、この風

利によって強い風压を日本に吹きかけてきたのであり、この風

利によって強い風压を日本に吹きかけてきたのであり、この風